

一九三〇年代の北京古書肆：目加田誠留学日記『北 平日記』から辿る

稲森，雅子
九州大学大学院人文科学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1498258>

出版情報：中国文学論集．43，pp.245-254，2014-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



一九三〇年代の北京古書肆

——目加田誠留学日記『北平日記』から辿る——

稲 森 雅 子

九州大学文学部中国文学研究室の初代教授、目加田誠博士（一九〇四―一九九四）は、晩年を福岡県大野城市で過ごされた。その蔵書はさくを夫人（一九一七―二〇一〇）のものと共に現在は目加田文庫として大野城市に寄贈されている。その中に『北平日記』と題する目加田先生の北京留学全期間（一九三三年十月―一九三五年三月）にわたる自筆の記録日記八冊が発見された。

日記の記述は約八十年前の北京の様子（伝統行事、四季折々の風景、商店街、芝居等）、日本人や中国人との交流、読書記録など多岐にわたる。とりわけ、書肆に関しては、七街区にまたがり二十五カ所を挙げる。中でも記述が多いのは、琉璃廠の来薰閣と世古堂、隆福寺街の文奎堂、東安市場である。当時は倉石武四郎、吉川幸次郎、小川環樹、長澤規矩也のほか、楠本正継、濱一衛といった中国学研究者も北京に留学あるいは滞在し、頻繁に古書肆を訪れている。そこで、本稿では『北平日記』（以下『日記』と略称）を中心に一九三〇年代当時の北京の古書肆の状況を探ってみたい。^②なお、本稿を執筆するに当たり、『北平日記』の閲覧と、本稿への引用を大野城市歴史をつなぐ事業推進室および目加田先生のご子息様方より許可をいただきました。冒頭に鳴謝致します。

一 北京古書肆及び琉璃廠概況

北京は明代以降最大の書籍集散地であり、目加田先生留学当時も依然として中国最大の古書市場としての地位を

保っていた。同時期を記録した孫殿起「琉璃廠書肆三記」によれば、琉璃廠周辺及び隆福寺街を中心に約三百の書肆があったことが分かる。長澤規矩也氏も「収書遍歴」で、交通網の整備に伴い中国各地に分散していた古書が北京、上海に集積されるようになっていった様子を述べている。張涵銳「北京琉璃廠書肆逸乘」には、民国二十年（一九三一年）頃、東方文化委員会が經書類を購入した事績を記し、山根幸夫『東方文化事業の歴史』には一九二六年度から一九三四年度の九年間で三六万八〇五〇元を投じ一八四八部を購入したとある。書肆からの日本人留学生への訪問販売も頻繁に行われていた。『日記』には「本屋、多く来る。」（昭和九年十二月二十二日）など見える。吉川幸次郎氏も「留学時代」で「本屋との応対が毎朝一時間以上かかる」と述懐しており、長澤規矩也氏「収書遍歴」も同様である。当時の日本の中国学が北京の書肆に依存する状況が垣間見えるよう。

当時、北京の三分の二以上の書肆が軒を連ねた琉璃廠は、北京市街の南西部、和平門を南に外城へ出た約一キロ先に位置し、骨董品や古書などの店舗が多く建ち並んでいた。その名は明代官窯として五色の琉璃瓦を製造していたことに由来し、清の乾隆年間以降発達した。街は東西に分れ、書肆は西側と東南の海王村公園境内に点在した。上海などを拠点とする新書出版業者も、商務印書館が西琉璃廠南に一九二二年に出店したのをはじめ、中華書局、文明書局、埽葉山房、広智書局も琉璃廠に支店を置いた。この頃から琉璃廠書肆による影印本の書籍出版もさかんになる。

目加田先生が琉璃廠を初めて訪問するのは北京到着から僅か八日後の昭和八年十月二十七日である。

午後、琉璃廠に行く。翰文齋と云へる書舗に善本多し。尤も値高き店なり。来薫にゆきて陳杭に逢ふ。商務印書館にて『四部叢刊』零本の『鮎埼集』を見る。十二元。この次買ひ度きもの也。

その後も度々目加田先生は琉璃廠を訪れておられる。

二 来薫閣（二代目店主陳杭）

来薫閣は、目加田先生が東京帝国大学二年の時『六十種曲』の取り寄せを注文され、北平到着後初めて琉璃廠を

訪れた際、いちやく店主陳杭（字済川、一九〇二—一九六八）と面会した店でもある。『日記』には二十五カ所に記述がある。目加田先生は留学中『西廂記十則』『雨窓欹枕集』『甲骨文編』などを購入、北京出發直前の昭和十年二月二十二日には書物発送を任せられ、昭和十七年北京出張時に再訪し、九州大学経費二万円で府県志を購入されるなど目加田先生からの信任が最も厚かった書肆といえるだろう。

九州大学との縁も深い。昭和九年三月二十—二十八日、楠本先生を団長とする九州大学学生旅行団の北京訪問時には「九州大学図書費の交渉をなす。来薰は、晚餐一度及び尚小雲の劇一度案内せり。」（三月二十日）と記録する。その時の同行者の一人である岡田武彦氏（当時は学生、のち九州大学教授）は「楠本博士は」北京の来薰ですか、あそこいい書物をどんどん注文されて、今の研究室の善本のたぐいが手に入った様です。」と語っている。また、九州大学附属図書館にある濱一衛旧蔵書を収めた濱文庫には『来薰閣書目第五期四卷』（民国二十五年、一九三六）が保存されている。

来薰閣は、咸豐年間（一八五一—六二）陳伯叔開業の琴店に始まる。民国元年（一九一二）、子孫の陳連彬が屋号を買い戻し書肆を開業する。民国二十年（一九三一）甥の陳杭が書肆二代目店主となる。当時は、戯曲小説や大型書籍が中心で、最盛期の収集数は年平均五万冊以上、時価総額十万元以上であったとされる。また、一九四〇年十月には陳杭の従兄弟張世堯を責任者とし上海支店を開設するなど、最も成長著しい書肆であった。来薰閣と日本人研究者との往来が盛んな様子は、長澤規矩也氏、倉石武四郎氏、吉川幸次郎氏の著述でも確認できる。吉川幸次郎氏は「来薰閣琴書店——琉璃廠雜記——」で次のように述べる。

私の人力車は、たいていまず「中略」来薰閣琴書店の前にとまる。「中略」さすがに琉璃廠随一の新人、陳済川の経営たるにふさわしく、入口は総ガラスに改造されている。

陳杭とは如何なる人物だったのだろうか。彼は河北省南宮県の人で、初代来薰閣店主陳連彬（字質卿、一八八三—一九四七）の甥である。十六才で隆福寺街の文奎堂に弟子入りし、一九二五年、陳連彬に招かれて来薰閣の経営に携わる。『中国旧書業百年』には、「一九二八年から一九三〇年の間、長澤規矩也らの要請により四度訪日した。東京、京都、大阪、神戸、九州、福岡等各地で古書展示即売会を開き、文求堂、臨川書店、京都滙文堂等古書店店

主との面識を得て、学者、藏書家、図書館を訪問し、中国古書市場を日本に拡大した。」とある。吉川幸次郎「来薰閣琴書店」にも同様の記述がみえ、日本でも古書販売に成功したことがわかる。

また、陳杭と交流のあった人物としては、魯迅、鄭振鐸、魏建功、老舍、傅惜華、趙万里、胡厚宣、吳曉鈴、徐森玉、王伯祥が中国側におり、日本人研究者としては、服部宇之吉、狩野直喜、青木正児などが挙げられる。

長澤規矩也氏は「来薰閣陳氏はもと隆福寺文奎堂の店員、京都大学の先生方にかわいがられ、戯曲小説ブームに乗じて、文奎堂が顧みなかつたこの方面の古書を集め、馬廉（隅卿）らの愛好者にもひいきにされた。」と述懐する。吉川幸次郎氏にも同様の記述があり「陳済川は英雄である」と結んで高く評価している。

目加田先生は、戦後再び来薰閣を訪問され、その時の様子を次のように綴っておられる。

（琉璃廠は）さびれていた。来薰閣も、毛沢東全集などの新本ばかり並んでいた。主人も出て来て、懐かしがってくれたが、今は全国から古書を集めて、図書館に収めるのが仕事だそうだ。久しく会わぬうちに、堂々たる風格になり、いまは人民代表の一人になっている、ということだった。

三 世古堂（張世順）

世古堂は、『日記』に来薰閣を上回る三十三回もあらわれ、書肆中最多である。昭和八年（一九三三）十一月二十二日に「桂君の紹介にて世古堂書店来る。誠に解りにくき発音にて一時間近く語れり。」とあるのが初めてで、翌二十三日には「朝、〔中略〕世古堂（張世順）。〔中略〕世古堂（極めて貧弱なる店）に『拍案驚奇』の大版二十円有りといふ故、午後琉璃廠にゆきしに、已に売れりといふ。」とみえ、決して好印象を抱いていたとはいえない。

ところで、世古堂に関する記録は、『琉璃廠小志』、『中国旧書業百年』などには見えず、張世順の名が「販書伝薪記」文鑑堂の弟子として記されるのみである。

目加田先生は『野叟曝言』『樊山集』のほか、九州大学のために『納書楹曲譜』を購入された（昭和九年二月二十四日）。『日記』では世古堂の訪問した様子がいきいきと綴られている。一部抜粋して紹介する。

世古堂又来る。持参の『書中燕居筆記』とて面白きものありしが、四十元なりといふに些かたじろぐ。〔中略〕文人満閑の戯れにすぎざれど珍しければ兩三日の約束にて留め置きつ。(昭和八年十一月二十五日)

世古堂来れども以後来るに及ばずと断りて返す。(昭和八年十二月二日)

午後、久し振りに世古堂来り、一時間位話してゆく。(昭和九年一月十四日)

世古堂来り、明日余及び米人、かの日本人を芝居によばんと云ふ。氣すすまず辞したるも、遂に断りきれず承知す。(昭和九年一月二十三日)

午後、世古堂との約束により桂君とともに琉璃廠にゆく。〔中略〕広和楼に聴劇。実に汚く且つ寒く、些かの興味なく強ひて坐せり。(昭和九年一月二十四日)

桂君、瀧沢氏来り。一緒に富源楼に世古堂に招かる。(昭和九年十月二十四日)

このように頻繁な交流があった世古堂であるが、昭和九年十月二十九日を最後に『日記』から姿を消す。

当時、北京の古書市場は競争が激化していたようであり、それは長澤規矩也氏が「古書店の変遷は東京以上に目まぐるしく、わたくしが毎年北京に行っていたところ、わずか一年の差で盛衰いちじるしいものもあったし、一年に店がなくなつたものもあった。」と述べることから看取れる。

世古堂は『日記』により存在がはじめて確認された。このように後世に名も遺さず消えていった古書肆が確かに存在していたことは間違いないだろう。



【図①】現在の文奎堂（2014年8月栗山雅央氏撮影）

四 隆福寺街文奎堂

隆福寺は、故宮の東北に位置する明代のラマ教寺院である。当時この門前街が琉璃廠に次ぐ古書店街で、長澤規矩也氏も「中華民国書林一瞥」で「琉璃廠を別項に譲れば、其次は内城東西北の隆福寺街」と記している。

文奎堂（前頁【図①】）は、その最有力店の一つで、光緒七年（一八八一）に王雲瑞が創業、民国十六年（一九二七）息子王金昌が跡を継ぐ。番頭格の弟子による合議制の経営方式をとり、弟子は来薰閣陳杭はじめ約四十名にのぼったという。また、『日記』に登場する古書肆第一号であることから当時、日本人の間でも評価が高かったことが容易に推測できる。

文奎堂来る。『越縵堂日記』
【図②③】を買ふ。四十五元。日本にて欲しかりしもの也。文奎堂は毎朝書物を持ちて来る。

（昭和八年十月二十四日）
『日記』では来薰閣、世古堂とほぼ同数記録されており、記載書目数は十八と群を抜いて多く、『碑伝集補』『呂晚村文集』『小説月報』など幅広い。九州大学には『国粹学報』を購入されたとの記事がある（昭和九年九月二十七日）。取り扱う書は量、質ともに優れ、長澤



【図②】九州大学附属図書館『越縵堂日記』51巻



【図③】「九州帝国大学図書印」

「九州帝国大学昭 9. 2. 28」の受付印（上下とも筆者撮影）

規矩也氏は「文奎堂王氏は、街の南北に店舗を構へ、琉璃廠の文友堂と共に平中の二大書肆といはれる。」と説明している。『倉石武四郎中国留学記』には二十六カ所の記述があり、来薰閣に次いで多い。吉川幸次郎氏にも随所に記事があり「文奎堂の趙殿成という番頭さんが、ぼくとたいへん仲よしでした。」などと述べている。「販書伝薪記」に趙殿成の名はなく、同姓で趙世長、趙明旭、趙広進が見える。『日記』にも趙殿成の名はない。

隆福寺の書肆街は現存するが、文奎堂はそこにはない。他の書肆同様中国書店に併合され、古書を扱う書肆として琉璃廠に屋号が残された。現在は琉璃廠西街路南に店舗がある。

おわりに

以上、目加田先生と関わりの深かった店を中心に当時の北京の古書肆の一端を辿った。日本の学界が古書市場の重要な顧客となり、新進の中国人研究者達とともに戯曲小説という新しい分野を開拓し、学界の、ひいては日中両国の古書の価値基準を大きく変えていった状況が再確認できる。

注

(1) 各氏の生卒年及び留学期間は以下のとおり。

- 倉石武四郎 (一八九七～一九七五) 一九二八 [昭和三] 年三月～一九三〇 [昭和五] 年八月
- 吉川幸次郎 (一九〇四～一九八〇) 一九二八 [昭和三] 年春～一九三一 [昭和六] 年春
- 小川環樹 (一九一〇～一九九三) 一九三四 [昭和四] 年三月～一九三六 [昭和十一] 年四月
- 楠本正継 (一八九六～一九六三) 一九二八 [昭和三] 年三月～一九三〇 [昭和五] 年四月 (独・英・中)
- 濱 一衛 (一九〇九～一九八四) 一九三四 [昭和九] 年五月～一九三六 [昭和十一] 年六月
- 長澤規矩也 (一九〇二～一九八〇) 一九二三 [大正十二] 年及び一九二七 [昭和二] 年より六年間毎年訪問

一九三〇年代の北京古書肆

- (2) 北京の古書肆について、以下の資料を適宜参照した。吉川幸次郎「来薰閣琴書店——琉璃廠雜記——」〔琉璃廠後記〕「吉川幸次郎全集第十六卷清・現代篇自跋」(以上三篇、『吉川幸次郎全集』第十六卷、筑摩書房、一九七五年)、「留学時代——質問に答えて」(『吉川幸次郎全集』第二十二卷、筑摩書房、一九七五年)、目加田誠「随想 秋から冬へ」(龍溪書舎、一九七九年)、長澤規矩也「中華民国書林一瞥」〔中華民国書林一瞥補正〕「わが蒐集の歴史の一斑」〔収書遍歴一、一二、一三〕(以上四篇、『長澤規矩也著作集』第六卷、汲古書院、一九八四年)、小川環樹「中国の春と秋」〔留学の追憶〕(以上二篇、『小川環樹著作集』第五卷、筑摩書房、一九九七年)、倉石武四郎『倉石武四郎中国留学記』(中華書局、二〇〇二年)、孫殿起「琉璃廠書肆三記」、雷夢水「琉璃廠書肆四記」、孫殿起・雷夢水「記廠肆坊刊本書籍」、張涵銳「北京琉璃廠書肆逸乘」、孫殿起「販書伝薪記」(以上五篇、孫殿起輯『琉璃廠小志』北京出版社、一九六二年)、徐雁「中国旧書業百年」(科学出版社、二〇〇五年)
- (3) 山根幸夫『東方文化事業の歴史——昭和前期における日中文化交流——』(汲古書院、二〇〇五年)を参照。
- (4) 中島長文「北京小記三 書肆の街・琉璃廠」(『颯風』第一八号、一九八五年)を参照。
- (5) 目加田誠「論文集のあとに」(『目加田誠著作集』第四卷、龍溪書舎、一九八五年)を参照。九州大学附属図書館文系合同図書室蔵の大部分な府県志書函群が当該のものとみられる(昭和十八年二月受入印あり)。
- (6) 「先学を語る——楠本正継——」、『東方学』第六十二輯(一九八一年七月)を参照。
- (7) 吉川幸次郎氏は、来日回数二回、展示即売会を東京、京都、名古屋の三カ所と記す。
- (8) 目加田誠「琉璃廠」(『秋から冬へ』、龍溪書舎、一九七九年)。
- (9) 清の李慈銘(一八二九—一八九四)撰、全五十一冊。同治二年(一八六三)〜光緒十五年(一八八九)の著者自筆の原稿をそのまま石印に付している。

【『北平日記』に登場する書肆及び書名一覧】

所在地	書肆名	書名	備考
琉璃廠	開明書局	說文句読（四川刻）、文始	他に訪れた記録を持つ日本人研究者
	翰文齋		長澤・倉石・吉川
	群玉齋	東周列国志、西湖佳話、群玉齋本儒林外史、三国志演義（嘉靖版）、嘯余譜（明版）、庶幾堂今案、漢魏樂府広序、三水小牘、顔学弁	長澤・倉石
	松筠閣	水滸伝（影印）	長澤・吉川
	商務印書館	鮎埼亭集（四部叢刊零本）、越縵堂統詩集、浙東學術溯源、曼殊、南唐二主詞、珠玉詞、小山詞、董仲則年譜、全祝望年譜、草堂詩餘（四部叢刊本）、石遺室詩話、說文解字	長澤・吉川
	世古堂	拍案驚奇、返生香、燕居筆記、雅趣叢書、野叟曝言、品花宝鑑、納書楹曲譜、詞律、香艷叢話、清人說薈、宣和遺事、樊山集	
	藻文堂	拜月亭（世徳堂刊）	
	直隸書局	說文解字（掃葉山房影印）	長澤・倉石
	通学齋	定盦全集（原版）、篋中詞、白雨齋詞話、読経瑣記	長澤・倉石・吉川
	東亜公司	華語萃編、日華辞典縮冊	長澤
	徳友堂	目錄学発微（北大出版）、古本書目（沈宗本）、古文旧書考、兩漢三国学案、詞譜、清芸文志、樵歌（四印齋本）	長澤・倉石
	南山閣	王船山遺書	
	文禄堂	今古奇観、雪月梅	長澤・倉石
	来薰閣	西廂記十則、碑伝集補、影印山帶閣楚辭、四庫全書総目、雨窓欹枕集、甲骨文編、国学論文索引三編、広韻	長澤・倉石・吉川
	不明	越縵堂統詩集、読通鑑論、南渡録、浣紗記、元曲零本（明版）、殺狗勸夫、紅樓夢散套、定庵全集附年譜、易順鼎編年詩集、疑雨集、宋金元詞現存書目、遊山詩集、章太炎文集	濱・楠本
隆福寺街	修綆堂	說文句読	長澤
	帯経堂		長澤・倉石

一九三〇年代の北京古書肆

中国文学論集 第四十三号

東安市場	東萊閣	西廂記、海録軒本文選	長澤
	文奎堂	越縵堂日記、碑伝集補、新学偽経考、呂晚村文集、董解元西廂記、辛稼軒詞疏証、詞学、 南江書録、北詞広正譜、漱玉集、大鶴山房全書、人間詞話、八十回本紅樓夢、小説月報、 兩当軒詩鈔、草堂詩余、北平図書館館刊、国粹学報	長澤・倉石・吉川
	保莖齋	詞学叢書	長澤・倉石
	不明	二十一史彈詞、絶妙好詞箋、詞林正韻、聖廟祀典図考、六朝事績編類、通志堂集、謫麟 堂遺集	
	佩文齋	漱玉詞	長澤
漢花園	不明	文史通義、清代学者生卒及著作表、鄭振鐸中国文学史、文心雕竜、日語会話読本、燕子 箋、飲水詞、嘗試集、紅樓夢、啼笑因縁、詩経音釈、大地、紅樓夢弁、国劇画報、鄭振 鐸中国文学論集、詞曲史、近代二十家評伝、黎錦熙国文法、現代中国文学史、太白、紅 樓夢伝奇、蘇曼殊全集、越縵堂詩話、胡適文選、天游閣詩集、樊山集、道咸同光四朝詩 史、詞学季刊、燕子箋評釈、王壬秋全集、温飛卿詩箋注、煙霞万古樓詩集、詩経原始、 新方言、今古学攷、読詞偶得、人間世第一卷合本、国故論衡、中国声韻学	
	北大出版組	北大学生、国学季刊	長澤
	景山東街	文学年報第一期、文哲季刊、国学季刊（胡適石頭記鈔本関連）、嶺南学報	長澤
	宣武門内	孽海花、新青年雜誌（第一、二、三年合本）、林黛玉筆記	
	西單商場	八十回本紅樓夢、画人行脚	
その他、 所在地不 明	協成堂	詞学全書	
	四存学会	四存月刊第一期	
	人人書房	雜拌児第二	
	北平図書館戯曲音楽展覽会目録、北平図書館善本書目、秋水軒尺牘、陰隲文図説、北京游覧指南、文 学季刊第一季、古韻標準、貫華堂原本西廂記、書影、骨董瑣記、戯劇叢刊、石頭記索隠、国学論叢（王 静安紀念号）、半厂叢書、説文二徐箋異、説文釈例、嶺南学報、楊守敬年譜		